

第683回番組審議会報告

2023年11月8日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長、栗栖義臣副委員長、川瀬慈委員、木戸哲委員、
小島幸保委員、津村記久子委員、増山実委員、安田真奈委員

■毎日放送出席者

虫明社長、宮田副社長、高山常務、酒井取締役、北野取締役、中野取締役、
奥田報道情報局長、橋本プロデューサー、伊佐治ディレクター、
柴田コンプライアンス局長、西村考査部長、中西番組審議会事務局長

◆諮問事項

毎日放送放送基準の一部改正について諮問し番組審議会が「改正内容が妥当である。」という答申をした。

◆報告事項

「令和5年地上基幹放送局の再免許に当たっての要請」について

◆審議事項

テレビ番組

「映像’23“限界ニュータウン”と言われても

～住民自治を生きる人々～」について

【概要】

“限界ニュータウン”と揶揄する亀岡市見立（けんだち）地区。分譲時の名称は「茨木台」。バブル期に不動産業者が造成、バブル崩壊とともに業者は倒産。元々業者の私有地として開発されたため水道・道路は自治会が受け継ぎ、維持管理は自分たちで行っている。しかし自治会役員の結束は強く頻繁に話し合い問題に取り組んでいる。人口減少に直面し郊外の住宅地がさびれゆく中、あえてそこに留まり自分たちの手で生活の手立てを作っていく人々の姿を通して「現代生活の便利さと不便さ」を考え、都心から消えつつある＜コミュニティの力＞を見つめ直す。

【各委員の主な意見は次の通り】

- *日本の社会で誰もが対峙しなければならない重要な課題を、腰を据えて記録し、視聴者に問題提起するような内容でありMBSの矜持を感じた。
- *大変興味深く見た。見立地区の区長が最後に言った「シン・ニュータウン」という言葉がすべてを象徴している。この言葉を引き出しただけでも、この番組は成功していると思った。
- *自治会の男性たちは大変だと思うが、活動することが生きがいになっている。逆説的に言うと、もしすべて行政がやってくれるところに住んでたら、この人たちは何を生きがいにしたのだろう。そう思うとどちらが幸せだろうと思った。
- *「とにかく大変」と思いながら見た。住んでよかったと本当に思っているのか疑問というか、心配になってしまう。新しく住んでしばらく経った人の声も聞きたかった。
- *番組の途中まで、画面に出てくるのが男性ばかりだった。女性や子どもや若者はどうしてるのかと思った。
- *水道代を滞納しているお宅が、もしかしたら払いたくない口実かもしれないが、仮に本当に困窮しているなら水道代を取り上げるとするのはさすがに住民の自治でやれることを超えているのではないかと思った。
- *私たちが自治体から受けている恩恵みたいなものを感じた方も多かったと思う。いろいろなとらえ方ができる番組だと思った。
- *SFみたいな話だと思って見た。自治会の取り立てや「水道を軽んじているのでは」という生々しい発言など、見ていて釘付けになった。その後どうなったのかぜひ続編を作ってほしい。
- *本人たちが納得して住んでいたならそれでいいという雰囲気はすごくあって面白かった。希望のある終わり方がよかった。
- *「誇りを持ってやっている」というポジティブなナレーションにすごくびっくりした。ただ大変そうと見ていた人は最後のナレーションに驚いたのではないか。
- *ハッピーエンド的に締めくくると、問題性を直視するところから逃げてなるべく暗い部分は見ないようにしようという思いが働いてしまう。
- *エンディングで問題提起をするよりも、あえてあのようなコメントで終わるほうが、新鮮だと思った。
- *自治体のサービスから取り残された限界集落にとってはヒントになる番組だと思うが、もう少し自治体側にも取材するとか、他の自治体で限界ニュータウン的なところで成功している例などの紹介があるといいと思った。
- *「新しいものは必ず古くなるが、そこでは人が生活し続けている」という視

点はニュータウンだけではなく、職業や文化などいろいろなものにも当てはまる。ドキュメンタリーが追うべき普遍的なテーマなので、これからも追いかけてほしい。

【番組制作者側の説明、質問への回答】

- * この街を中心に動かしているのは男性たちという、ある意味日本の縮図であり社会の構図も逆に描けたのではないかと思う。
- * 制作者もニュータウンの出身で生まれたエリアがだんだん寂れていく様子を見ていたので、エンディングはエールを送りたいという気持ちが強く出過ぎたかもしれない。
- * 続編というよりは人口減少というテーマで、日本が非常に深く抱えている問題を突くような番組を作っていきたい。

以 上